

玉篇・切韻系韻書を典拠とする『医心方』の反切注文について

加藤大鶴

【キーワード】反切 字音 医心方 玉篇 切韻

1 はじめに

院政期の加点を伝える半井家本『医心方』には多数の反切注文（本稿では反切を含む注文を反切注文と呼ぶ）が見られる。これらの一部には典拠名が記されており、稿者も『本草和名』『和名類聚抄』『新修本草音義』『本草注音』などが関与していることを論じたことがある（加藤大鶴 2005）。反切注の典拠には、このほか玉篇（岡井慎吾 1933・馬淵和夫 1952・西崎亨 1995）や切韻系韻書（上田正 1984）が関わっていることが明らかとなっており、出典研究や字音研究に役立てられてきた。

本稿ではまず、典拠名が記されている反切注文だけではなく、典拠名が記されていない反切注文についても、玉篇と切韻系韻書を典拠とすることを推定する。また、半井家本『医心方』における、反切を含む字音注には、色と濃淡の違いに基づいて3種の筆が区別できる。これらの3筆は、半井家本への移点祖本である宇治本（散逸）における3筆を移点したものとされる。ただし半井家本への移点には識語などから複数者が関わっていることが知られ、本稿での調査でも3筆それぞれの内部に8類の筆跡を認めることができた。これらの8類は全て宇治本の加点状況を伝えるものなのか、あるいはそうでないのかという問題は、字音注記の基礎的な取扱自体に関わるものであるが、これまで十分に論じられて来ない。本稿では筆跡の違いによって反切注文を分類し、典拠との対応を明らかにすることで、院政期の医学書における典拠利用の一具体相を明らかにしたい。

2 調査対象と巻8 識語

2.1 資料および調査範囲

『医心方』は永観2年（984年）に丹波康頼によって撰進された医書である。現存する『医心方』写本のうち、最古のものは半井家旧蔵本（奥書によれば天養2年1145移点。以後半井家本と称す）と仁和寺蔵本（保元3年1158～嘉応2年1170写とされる。本文と同時に字音点も写したか。以後仁和寺本と称す）である。両本の字音点は宇治本を共通の祖本としていると言える。

本稿では両写本における反切注文を対照することで、移点祖本である宇治本へ

の反切注文がどのような典拠に基づいていたのかを探る。半井家本と残存する仁和寺本とで対照可能なのは、残存する仁和寺本の巻1、5、7、9、10、19（第58葉のみ）、27の7巻と、半井家本の対応する箇所である。仁和寺本巻1～10は京都仁和寺蔵、巻27は前田家尊経閣文庫蔵（小曾戸洋1985の報告に基づく）をそれぞれ原本にて確認した。巻19は、小曾戸洋・杉立義一1991の報告によれば仁和寺に蔵されているとのことであるが、小曾戸洋・杉立義一1991所載の影印と、オリエント出版による影印本とを照合することで字音注記を確認した。半井家本は東京国立博物館にて原本を閲覧した。

2.2 半井家本巻8識語について

半井家本巻8にみえる識語から、移点祖本である宇治本での加點と、宇治本から半井家本への移点状況を知ることができる。松本光隆1979・1980、築島裕1994によれば、半井家本の注記には3筆あり、それぞれが宇治本における3筆を移点したものと推定されている。対応は次の通りである（前項半井家本における筆の種類、後項宇治本での加點者）；A. 墨筆…藤原行盛加點、B. 濃色朱筆…藤原行盛加點、C. 淡色朱筆…丹波重基加點*¹。稿者の調査でもこの対応を確認している。また移点についてはそれぞれ次の①～④が分かる*²。①移点は藤原中光が行った。②比較は清原定安が行った。③不審な箇所は直講中原師長、医博士丹波知康、重成らが医家本と比べあわせた。④文殿が加えた勘物（異本注記など）は中原師長が墨で書入、朱で合点を施した。以上から、移点には少なくとも6名の人間が関わっていることが判明するが、事実ABC筆内にも6類以上（実際には8類）の筆跡が見られ、部分的には識語と対応する。本稿では、筆の色と濃淡で区別される半井家本の3筆をそれぞれA～C筆と呼び、筆跡で区別される8類をi～viii類と呼ぶ。

ところで加藤大鶴2005では、半井家本のABC筆による各反切注文には、仁和寺本との一致率に異なりがあることに触れた。C筆反切注が半井家本と仁和寺本とで9割程度一致率を示すのに対し、AB筆は6割弱にとどまる。これについ

*¹ 巻8識語に「初下點 行盛朝臣 朱星點 墨仮字／重加點 重基朝臣 朱星點 假字勘物又以朱點句／于儒點」とある。

*² 同「天養二年二月以宇治入道太相国本移點／移点少内記藤原中光 比較助教清原定安／移點比較之間所見及之不審直講中原師長／醫博士丹波知康重成等相共合醫家本畢／文殿所加之勘物師長以墨書之令朱合點」とある。

て、AB筆には宇治本から半井家本への移点時に医家本(上記③)を参照したか、新たに加点した例が含まれることを推測した。本稿ではこれらの新しい書入を区別し、宇治本の段階で加点された反切注文の典拠と違いがないか検討するため、筆跡を8類に分類したわけである。識語の6名全員が各筆跡に対応するとしても、うち少なくとも2類は新しいものであることになる。この問題については、4節以下で、本資料中もっとも多数であるA筆の筆跡を対象として考察を行う。

3 調査方法

3.1 玉篇、切韻とその諸本について

典拠の推定に用いた玉篇と切韻系韻書の諸本について述べる。

玉篇(顧野王、543年)については以下を用いた。『原本玉篇残卷』9・18・19・22・27巻。このほか玉篇の抄出本である空海撰『篆隸万象名義』を参照した。これより時代が下ったものに宋代の『大広益会玉篇』(1013年)がある。その他上田正1986で遺漏がないか確かめた。玉篇の逸文については、岡井慎吾1933、馬淵和夫1952を用いた。

切韻系諸本(陸法言『切韻』601年)は、多くの諸本が存在し、日本にも多くが伝来している。半井家本に引用される切韻系韻書の典拠名のみを挙げれば、『陸法言切韻』(601年)のほか、『郭知玄切韻』(不明)、『武玄之韻詮』(690-704年)、『麻杲切韻』(705年)、『孫柚切韻』(712-755年)、『孫愐唐韻』(751年)、『大宋重修広韻』(1008年)などがある(成立年代は沼本克明1986に基づいた)。本稿での調査では、切一〜三・王一〜二・唐韻等を収めた『十韻彙編』*³、『刊謬補缺切韻』(王三)原本影印部分、澤存堂本を底本とした『大宋重修広韻』(1008年)を用いた。その他上田正1973・1975・1984で遺漏がないか確かめた。

3.2 先行研究との関連

半井家本に引用される玉篇については、西崎亨1995に詳細な報告がある。当該論文では①典拠名付き反切注文は全30巻中69カ所ある、②匡郭外注記は後

*³ 各文献の略称は『十韻彙編』による。以下簡略に説明する。「切一」: 敦煌発見 S2683。「切二」: 敦煌発見 S2055。「切三」: 敦煌発見 S2071。「王一」: 敦煌発見 P2011。「王二」: 唐写本、瀆朝宮廷旧蔵。王仁向『刊謬補缺切韻』その他の混合本。「唐」: 唐写本孫愐『唐韻』か、とされるもの。「刊」: 敦煌発見 P2014 P2015。五代刊本。

代の別筆によるものである、としているが、半井家本のみを分析対象としており仁和寺本との対照は行われていない。本稿では仁和寺本との対照を通じて、識語に示される宇治本に存したと推定される例と、移点時以降の書入を区別して分析を行う。半井家本に引用される切韻系韻書については、上田正 1984 に概略的な解説がある。上田氏の解説によれば 3.1 で掲げた諸本の反切注文は直接の引用ではなく、菅原是善『東宮切韻』（9 世紀末ごろ成立、逸書）に引用されたものの孫引きであるという（p.489）。これらは『東宮切韻』を含め、ほとんどが逸書となっている。

また上田氏によれば書名を記さない反切注文は 1179 例あるとされる。本稿では、半井家本の限られた範囲ではあるが、そうした典拠名を有さない例についても可能な限り、典拠を明らかにする。

3.3 調査結果の分類と概略

「4 反切注の典拠」では、半井家本に現れる反切注文を、玉篇と切韻系韻書に基づき、典拠を具体的に見ていく。典拠名が付されているものは前掲文献に反切注文が認められれば典拠が確認できたことになるが、典拠名なしのものは一致や類似の認定について、一定の基準を設定しておかなければならない。古屋昭弘 1979・1983・1984 によれば、王仁昉は切韻の反切注や義注を増補した『王仁昉刊謬補缺切韻』を作成する際に玉篇を用いたことが明らかになっており、反切注が両文献に一致するこうした例はどちらを典拠としたか決めるべき手だてがなくなってしまう。このような事態に対処するため、典拠名なしの反切注の取り扱いについては、義注も含めた注文全体を対象とし、かつ玉篇・切韻系韻書両文献に相互に一致しないものを取り上げた。

典拠分類	総	A	B	C	Rr	Ll	外
1.0. 玉篇典拠名あり	11	9	2	0	6	4	1
1.1. 典拠名なし <small>玉篇と反切・義注共に一致 かつ切韻系韻書と反切・義注共に不一致</small>	40	38	1	1	23	12	5
2.0. 切韻系韻書典拠名あり	9	8	1	0	4	1	4
2.1. 典拠名なし <small>切韻系韻書と反切・義注共に一致 かつ玉篇と反切・義注共に不一致</small>	31	24	6	1	16	11	4

表 1 玉篇・切韻系韻書 筆の種類と注記位置（半井家本）

表 1 は上記基準に基づき、典拠別に反切注文出現数をまとめたものである（記号等は注*4 を参照）。以下 4.1 4.2 では典拠名が記されている表の 1.0 と 2.0、及び典拠名は記されないが確実性が高い 1.1. と 2.1 の反切注文データを見る。

4 反切注文の典拠

4.1 反切注文の典拠が玉篇のもの

4.1.1 玉篇典拠名注記あり

1. 「臙」㊟A 徳㊟A カク㊟Ai 呼各(虫損)反羹一也又作臙(ママ)古博反羹肉玉篇云羊(虫損)肉(0123b2)〔仁〕
〔玉〕㊟「臙」呼各反肉羹也㊟「臙」呼各切臙羹也
2. 「麵」㊟A ムキコ㊟Ai 玉亡見反麦麩也蜀以枕櫛木屑為麵(0126a4)〔仁〕
〔玉〕㊟亡見反 麦糶也麵也㊟亡見切麦麩蜀以枕櫛木屑為麵
3. 「齧」㊟Aii 玉胡戒反齒相切也方言齧怒也(0550b9)〔仁〕
〔玉〕㊟胡戒反怒也相切也㊟何介切…
4. 「懸疣」㊟A 去㊟Aii 玉都絳反患也〔仁〕㊟A タウ㊟Aiii 陟降反患也(2709a6)
〔玉〕㊟都絳反患也㊟陟絳切患懸
〔切〕㊟陟降 切㊟丁降反…又呼貢反(王二)
5. 「膳」㊟B 玉充尹反肥也(0533b8)〔仁〕
〔玉〕㊟充尹反肥也㊟充尹 切膳肥也
6. 「燗」㊟A 徳㊟A コク㊟Ai 玉許酷反熾也燒也(0108a2)
〔玉〕㊟許酷反熾也
7. 「堅硬」㊟A 去㊟Ai 玉五更(虫損)反堅硬也 切堅牢也(0121b3)
〔玉〕㊟五更切堅硬 亦作鞭
8. 「鱗」㊟Aii 玉丘禹反齒蟲也(0545a3)
〔玉〕㊟丘禹反齒蟲也 鱗字㊟丘禹 切說文云齒蟲也
9. 「帶」㊟Av 直計反㊟Aiv (頭) 玉篇曰徒計徒結二切隱蔽兒(0710b8)
〔玉〕㊟達計反…㊟徒計徒結二切帶翳隱蔽兒
10. 「熱殖」㊟B 玉側於反方言積也盛也繞也(1031b1)
〔玉〕㊟側於 酢菜也㊟側於 切淹菜為漬也
11. 「癩」㊟Aiii 玉篇亥間反小兒癩病(2711a9)
〔玉〕㊟核間反 小兒癩 也㊟亥間反小兒癩病

以上の例*4 は典拠名があり、また『篆隸万象名義』や『大広益会玉篇』に一致する。典拠名の形式には「玉」「玉篇」「玉篇云」「玉篇曰」などがある。仁和寺

*4 用例の掲げ方を示す。各用例の番号に続く「」内が半井家本掲出形、下線字が当該字。㊟=声点、㊟=右傍内側、㊟=右傍外側、㊟=左傍内側、㊟=左傍外側、㊟=欄外注。ABCは筆の種類、Aに続くi~viiiは類別した筆跡。〔仁〕=仁和寺本にも字音注記あり。〔切〕=切韻系韻書(㊟=広韻、㊟=十韻彙編(各文献の略称は『十韻彙編』による)、㊟=完本王韻(王三))、〔玉〕=玉篇(㊟=篆隸万象名義、㊟=大広益会玉篇)を各々示す。

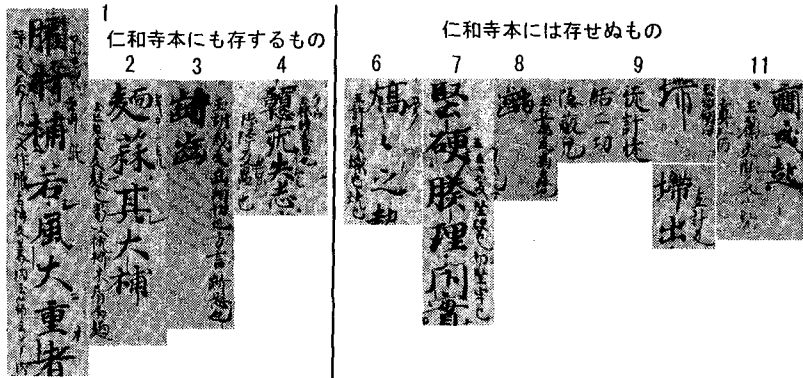


図1 玉篇典拠名付き反切注文：筆跡による検討

本にも存する例(1～5.)には、義注も含めれば1.のように『大広益会玉篇』に近いものもあるが、反切は『篆隸万象名義』とも一致している。『大広益会玉篇』は玉篇原本系を継承しながら増補・改編がなされており、『篆隸万象名義』は玉篇原本系を抄出したものであるから、現存しない玉篇原本系に基づいたと考えるべきだろう。

仁和寺本に存しない例(6～11)は、移点時以降の書入か別本からの移点と考えられる例を含む。特に9は反切の表示が「…切」であり、その他の「…反」とは異なる上に『大広益会玉篇』にほぼ一致している。この例のみは『大広益会玉篇』に基づいた、半井家本移点以後の加點例と考えて良いだろう。

図1の筆跡(A筆のみ取り上げる)に注目すると1、2、6、7(i類)、3、4右傍注、8(ii類)、4左傍注、11(iii類)がそれぞれ同筆と認められる。4右傍反切注文のみ仁和寺本にも存し『篆隸万象名義』に一致するが、左傍反切注文(iii類)は仁和寺本にない。左傍注の典拠は反切に限れば広韻、義注は玉篇に基づくように見えるが不明である。9欄外注(iv類)は反切形式のみならず筆跡からも移点時以降の書入と推定される。9右傍注(v類)は4.1.2以降で触れる。

4.1.2 玉篇に一致(かつ切韻系韻書に不一致)

- 「痿癢」㊶Ai 東㊸A 𠂔㊹A 於危反不能行也痺濕病也(0105a6)㊸
 ㊸_玉 ㊶於媯反痺也不能行也㊹於危切不能行也痺濕病也 説文音筴
- 「痿癢」㊶A 徳㊸A クエツ㊹Ai 俱越反逆気也(0105a6)㊸
 ㊸_玉 ㊶俱越反逆気也㊹俱越切逆気也…
- 「蛔虫」㊸Av 胡恢反人腹中長虫也(0701a9)㊸

- 玉 ㊦胡灰反㊧胡恢反人腹中長虫也
4. 「攤緩」 ㊦Avi 他丹反開也 (1946a3) 仁
- 玉 ㊦奴但反按也㊧奴但切按也 他丹切開也
5. 「喘悸」 ㊦Avii 渠季反心動也 (0911b4) 仁
- 玉 ㊦渠季反心動也㊧其季切 心動也
6. 「瘡」 ㊦A 上㊧A フサカル又エカハラヤム㊬A ナリ㊭Ai 〔頭〕 補被平几二反腹内結病也 (0111b5) 仁
- 玉 ㊦平几反痛也否也㊧補被平几二切腹内結病
7. 「焯」 ㊦Ai 〔脚〕 焯亦章反炎也又焯焯出陸善經字林 (0138a1) 仁
- 玉 ㊦余尚反㊧亦章切炎也
8. 「硬」 ㊦Avii 〔脚〕 硬 五更反堅一又作鞭(0920a1) 仁
- 玉 ㊦五更切堅硬亦作鞭
(仁和寺本にも存するもの、他に 18 例あり)
9. 「疔石」 ㊦Ai 甫廉反刺也以石刺病也㊬A へム (0104b2)
- 玉 ㊦甫廉反刺也㊧甫廉反 蒼頡篇疔刺也 説文 以石刺病也…
10. 「白錫」 ㊦Avii 徒當反飴謂之一 (0905b9)
- 玉 ㊦達當反飴…㊧徒當 反飴和饊也㊬徒當 反…方言凡 飴謂之錫…
11. 「拂」 ㊦B 入㊬Aiii 扶勿反意不舒也 (1037b6)
- 玉 ㊦扶物反髣也㊧扶勿切意不舒治也
12. 「揣」 ㊦A ハカレハ㊭Aiii 〔頭〕 揣 初委丁果二反度高下曰揣又試也 (1017b5)
- 玉 ㊦丁果 反㊧初委丁果二切度高下曰揣又試也
13. 「齧」 ㊦Aiii 〔下〕 丘禹反説文云齒齧也 (2714a3)
- 玉 ㊦丘禹 反 齒齧也 齧字㊧丘禹切説文云齒齧也
(仁和寺本に存せぬもの、他に 9 例あり)

以上、仁和寺本にも存する例・存せぬ例とも、玉篇を典拠としたことが推定できる（紙幅の関係上、切韻系韻書の反切注を掲げることは省略した。同様の理由で 4.2.2 では玉篇の反切注を省略している）。これらは 4.1.1 玉篇典拠名ありに掲

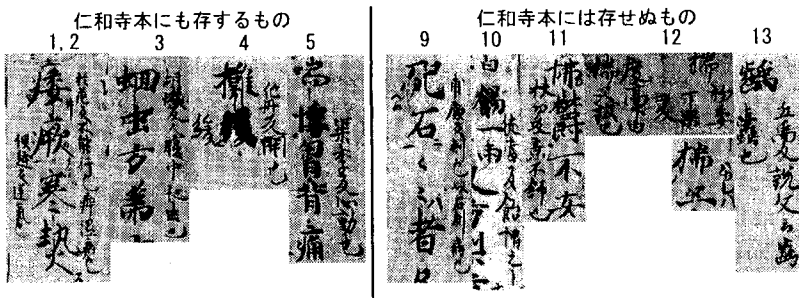


図2 玉篇典拠名なし反切注文：筆跡による検討

げた例と同様に、原本系玉篇に基づいたものと考えられるが、4、5は原本系玉篇残巻に当該反切と義注を確認することができる。両例とも原本系玉篇の義注から「説文」「蒼頡篇」「方言」など典拠名を省略した形を掲げていることが分かる。6～8は欄外にありながら仁和寺本にも存するものであり、移点時以降の書入とは見なしがたい。先掲の西崎亨 1995 では玉篇典拠名つきの例について欄外のものは移点時以降の書入としているが、再度検証してみる必要があるだろう。

図2(墨筆のみを掲げた)は全40例のうち、各筆跡を代表させたものである。図1にも現れるのは1、2、9のi類、3のv類、11～13のiii類である。iii類は仁和寺本には存せぬグループにのみ現れ、移点時以降の書入と考えられる。その他4(vi類)、5、10(vii類)があった。

4.2 反切注文の典拠が切韻系韻書のもの

4.2.1 典拠名あり

- 「凹出」㊸Av 於甲反又作峇又作沓切云中心小培也又人脈刺穴安針口(虫損)刺之穴也ナカクホナリ(0711b5)㊸
- 「頰類」㊸Ai 距員反廣雅曰頰也㊸A 切頰骨也(0112a4)㊸
 ㊸巨員切 頰骨也㊸巨員反 頰骨(切三王一)具脊(刊)㊸巨員反 頰骨
- 「莞」㊸Avii 古桓反又胡官反似蒲而園也㊸A〔頭〕切又作莞似蘭而園可作席(0920a1)㊸
 ㊸胡官切 似蘭而園可為席 又音官/胡丸切 草名可為席亦云東莞郡名又姓姓苑云今吳人又胡官切㊸胡官反 小蒲席
 ㊸胡官反似蒲園 也小蒲也㊸古桓胡官二切似蘭而園 可為席詩曰莞下鞞
- 「筴食」㊸A 徳㊸Ai 切苳 在各反竹索西南夷尋之以渡水㊸B〔頭〕苳 詐白反磨碎不以完粒(0104b5)
 ㊸在各切 竹策西南夷尋之以渡水㊸在各反 竹策(王二)在各反 竹策西南胡尋之以渡江(唐)㊸在各反 竹策苳
- 「堅硬」㊸A 去㊸Ai 玉五更(虫損)反堅硬也 切堅牢也(0121b3)
 ㊸「鞭」五爭切 堅牢「硬」同上(爭字は諍に訂す)
- 「單豹」㊸B 去㊸A セン㊸Aiii〔頭〕唐韻時口(虫損)反姓也(2707a1)
 ㊸時戰切 單父縣亦姓㊸市戰反 單父(王二)㊸視戰反…(汚損で判読できず)
- 「張鞞」㊸A 去㊸A ソン㊸Aviii〔頭〕鞞 唐韻祖悶反人名魏時張鞞(2709a4)
 ㊸祖悶切 人名魏時張鞞 又至也㊸祖困反 魏時張鞞 人名(王一)㊸在困反 魏時張鞞 人名
- 「瘦弱」㊸A 上㊸Aiii〔脚〕宋云接損説文云臞所祐反(0117a4)
 ㊸所祐切 接損説文臞也㊸所救反 損正作瘦(王一)所祐反 俗瘦通(王二)所祐反 瘦損亦作瘦(唐)㊸所救反 損正作瘦

以上は切韻系韻書の典拠名を持つ反切注文である。1～5は「切…」とあるが、具体的な文献は特定しがたい。個別的には3、4など典拠が広韻と思しきものも

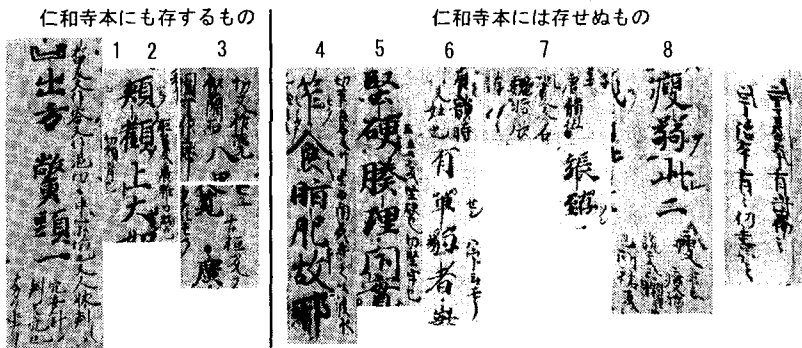


図3 切韻系韻書典拠名あり反切注文：筆跡による検討

ある。1は切韻系韻書に掲出字を見つけないことができなかった。これらは全て玉篇の反切注を補う形で注記されている。

図3の1はv類、2、4、5はi類、3はvii類、6、7は移点時以降書き入れと考えられるiii類である。6、7は「唐韻…」とある。8は「宋云…」とあり、宋韻＝広韻を用いたことが明示されている(viii類とする)。なおこの反切注文は筆跡の特徴から、識語に見える直講中原師長によるものといえる。2.2節で触れたように、異本注記は中原師長が墨筆で書き入れ朱で合点を施したことが知られるが、図3に掲げた異本注記「重基本…」 「宇治本…」と反切注文「宋云…」の筆跡は同じであり、どちらも朱の合点が付される。中原師長が直接広韻を参照したか、医博士丹波知康、重成らが所持していた医家本から移点したもののかは不明であるが、いずれにせよ宇治本からの移点ではないことは確かである。

4.2.2 切韻系韻書に一致（かつ玉篇に不一致）

1. 「撰々」㊟A 去㊟Ai 古対反心乱也㊟A クワイ (0112a3) [二]
 [切] ㊟古對切 心亂也㊟古對切 心乱 (王二) 古對反 心乱 (唐) ㊟古對切 心乱…
2. 「嬌虫」㊟Av 如招反人腹中短虫也 (0701a9) [二]
 [切] ㊟如招切 人腹中 蟲/於霽切 腹中蟲/又如消反㊟如招反 人腹中 虫 (切三)
 ㊟如招反 人腹中短虫…
3. 「醞」㊟Avii 倉故反醬醋說文作醞 (0928a2) [二]
 [切] ㊟倉故切 醬醋說文作醞㊟倉故反 醬又作醞 (王二) 倉故切 醬醋說文作醞 (唐)
 ㊟倉故反 醬醋又作醞
 (仁和寺本にも存するもの、他に7例あり)
4. 「灑々」㊟A 東㊟A へウ㊟Ai 甫嬌反詩云雨雪一々 (0108a2)
 [切] ㊟甫嬌切 雪兒 詩云雨雪灑灑㊟甫嬌反 雪兒 (切三) ㊟甫嬌反 雪兒

5. 「件」㊶B 去㊶Aiii〔頭〕件 其聲反分也 (2712b6)

㊶切 ㊶其聲切 分次也㊶其聲反 (切三) ㊶其聲切 分次也 (王三)

6. 「蘸」㊶Aviii 庄陷反 以物内水也 (0520a6)

㊶切 ㊶莊陷切 以物内水㊶滓陷反 以物内水 (王一王二) 庄陷切 以物内水 (唐) ㊶責陷反 以物内水

(仁和寺本に存せぬもの、他に 24 例あり)

以上、1~6 は切韻系韻書を典拠としたものと推定されるが、典拠名を持つ例同様、具体的にどの文献を典拠としたかは特定しがたい。図4は各筆跡の代表を示した。1、4はi類、2はv類、3はvii類であり、仁和寺本にも存する例に見られる筆跡である。5はiii類、6はviii類であり、これまで見たように移点時以降の書入と考えられる。

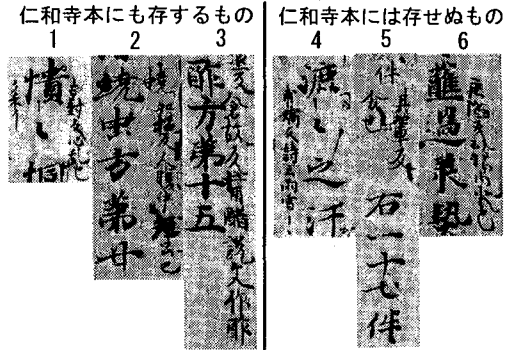


図4 切韻系韻書典拠名なし反切注文：筆跡による検討

4.3 玉篇反切注に切韻義注を添えるもの

1. 「癖」㊶Avii 返璧反 宿食不消也又云腹痛也 (0918a7) ㊶

㊶玉 ㊶返璧反 辟不能行 宿食不消 ㊶匹辟切 食不消

㊶切 ㊶芳辟切 腹痛/普擊切 疾癖病 ㊶芳辟反 腹痛 (切三王二) 腹痛 (王一) 芳昔反 腹痛 (唐) /なし ㊶芳辟反 腹痛/なし

2. 「焯」㊶Ai〔脚〕焯亦章反 炎也又焯焯出陸善經字林 (0138a1) ㊶ 「出陸善經字林」なし

㊶玉 ㊶余尚反 ㊶亦章切 炎也

㊶切 ㊶與章切 焯焯出陸善經字林

3. 「擲」㊶A フルヒ ㊶Avii 一振也 ㊶Avii 雉戟反 (0916b7)

㊶玉 ㊶なし ㊶雉戟 切投也 弁也

㊶切 ㊶「擲」直炙切 投也 擲也 振也 「擲」上同 出説文 ㊶「擲」直炙反 (切三王一王二) 直隻反 (唐) ㊶「擲」直炙反

A 筆反切注文のなかには、1字に対して複数注記されるものがある。4.2.1で触れたような玉篇と切韻系韻書を組み合わせたものには、典拠名を交える場合(4.2.1の2、3、5)や上記1~3のように「又云…」 「又…」 「一…」の形式を取るものがある。これらは①i~viii類の各筆跡を相互に交えることがない(すなわ

ち新たに注文を書き足したというわけではなく)、②上記3例と4.1.1の3例、合計6例のうち4例は仁和寺本にも存する、③形式としては、本調査の範囲では1例を除き(4.1.1の2)玉篇に切韻系韻書を添えてありその逆はほとんどない、④内容としては、玉篇の反切注文に切韻系韻書の義注を補う、という特徴を持つ。こうした特徴から、まず宇治本への加點段階で両文献を組み合わせた反切注文が存在したことが分かる。組み合わせの形式と内容からは、A筆加點者が、玉篇を切韻系韻書より優先したことが推測されるが、両文献の權威の高さの違いに基づくのだろうか。しかしそうだとすれば本調査で多数確認された、切韻系韻書からの反切注文がなぜ現れているのかが説明できない。同様の傾向は渡辺さゆり2002において『金沢文庫本白氏文集』にもあるとされる。また組み合わせ順序を別とすれば、『新撰字鏡』のような両文献からの引用が見られる字書もある。玉篇の反切注に切韻系韻書の義注を補った、手控え的な文献が存したかとも思われるが推測の域を出ない。

5 おわりに

本稿では、半井家本『医心方』における玉篇および切韻系韻書を典拠とした反切注文について、現存する仁和寺本残巻と一致する部分に現れる反切注文との対照、および筆跡上の特徴による分析を通じて、宇治本に存した反切注文と半井家本への移点時以降に書き入れられた反切注文とを分類した。これによって院政期の医学書における典拠利用の一具体相を明らかにした。以下、結果をまとめる。

1. ABC筆それぞれ、玉篇と切韻系韻書の反切注文を参照している。
2. ①玉篇は『篆隸万象名義』抄出以前の原本系や、『大広益会玉篇』を典拠としている。②切韻系韻書は、バリエーションが多く特定は難しいが、『広韻』『唐韻』およびそれ以前の韻書に基づいている。
3. ①A筆には8類の筆跡が認められ、うちiii類(『唐韻』の典拠名を記す)、iv類(『大広益会玉篇』の典拠名を記す)、viii類(宋韻=『広韻』の典拠名を記す。中原師長による)の3類は移点時以降のものである。
4. 欄外注は移点時以降書入と推定できるものが多いが、そうでないものもある。また前項で触れた移点時以降の書入は欄外に記される傾向にあるが、右傍・左傍に記される場合もある。
5. 玉篇の反切注に切韻系韻書を補ったものがみられる。

本稿では、紙幅の都合上 BC 筆の筆跡や、1 字に複数反切注文が記されるうち ABC 筆が互いに関わるものなどに触れることができなかった。後者について、加藤大鶴 2005 では本草音義書類を典拠とする反切注・類音注の選択に高度な字音知識が介在していることに触れたが、本稿で取り扱った反切注の選択には字音の違いより意味の違いに着眼したものが多くみられる。反切注・類音注と声点の関わりも含め、別稿にて改めて論じたい。

(参考文献)

- 上田正 1973『切韻殘卷諸本補正』東洋学文献センター叢刊 19
上田正 1975『切韻諸本反切総覧』均社
上田正 1984『切韻逸文の研究』汲古書院
上田正 1986『玉篇反切総覧』上田正
岡井慎吾 1933『玉篇の研究』東洋文庫
加藤大鶴 2005『『医心方』字音注記出典と加點方針についての一考察 — 『本草和名』『和名類聚抄』との比較を通じて—』『論集 1』アクセント史資料研究会
木田章義 1994「顧野王『玉篇』とその周辺」『中国語史の資料と方法』京都大学人文科学研究所
小曾戸洋 1985「新出の『医心方』古写零本卷二十七 — 現存した国宝仁和寺本の倣本 —」日本医史学雑誌 31-4
小曾戸洋・杉立義一 1991「新出の国宝仁和寺本『医心方』零葉 — 卷十九第五十九葉」日本医史学雑誌 37-1
築島裕 1994「半井家本醫心方の訓点について」『醫心方の研究』オリエント出版
西崎亨 1995「半井家本『医心方』所引『玉篇』覚書き」武庫川国文 45
沼本克明 1986「古辞書・音義の音注と漢音」『築島裕博士選厝記念国語学論集』明治書院
古屋昭弘 1979「王仁响切韻に見える原本系玉篇の反切」中国文学研究 5
古屋昭弘 1983『『王仁响切韻』新加部分に見える引用書名等について』中国文学研究 9
古屋昭弘 1984「王仁响切韻と顧野王玉篇」東洋学報 65-3・4
松本光隆 1979「書陵部藏医心方の訓法一助字の訓法を中心として」鎌倉時代語研究 2
松本光隆 1980「平安鎌倉時代における医書の訓読について」国文学 87
馬淵和夫 1952『玉篇逸文補正』東京文科大学国語国文学会紀要 3
渡辺さゆり 2002「金沢文庫本白氏文集に書き込まれた反切注について」訓点語と訓点資料 108

(参考辞書類)

- 『高山寺古辞書資料第一 篆隸万象名義』東京大学出版会、1977/『大広益会玉篇』中華書局、1987/『原本玉篇殘卷』中華書局、1985/周祖謨 1960『広韻校本』中華書局/劉復・魏建功・羅常培他 1936『十韻彙編』台湾学生書局/『唐写全本王仁响刊謬補缺切韻』廣文書局、1964